

学会の10周年をむかえて

会長 森 茂

学会の10周年を期として、本号から会誌の誌名を変更し、表紙も新しくなりました。この機会に学会の10周年をふりかえり、会誌を中心に考えたことを述べます。

10年間の研究の進歩

学会発足後10年間、プラズマ理工学の学問的、技術的進歩は著しいものがあります。また、実用が先行した感のあるプラズマ・プロセスなどのプラズマ応用は、プラズマ理工学とのつながりを強め、一層有用なツールとなりつつあります。核融合については、トカマクを始め、ヘリカル、ミラー、逆転磁界ピンチ (RFP)、磁界逆転配位 (FRC) などの磁界閉じ込めも夫々に大きく発展しています。慣性閉じ込めでは、米国が大幅な研究公開を進めており、それが契機となって従来の日本を中心とする研究が一段と加速されると考えられます。

これらを総括的に考えて、日本のプラズマ・核融合の研究は、世界をリードする実績と実力を備えてきていると言えましょう。

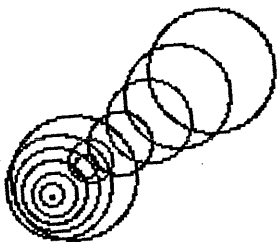
研究の進歩と学会の果たした役割

このような研究の実態に対応して、学会は、会誌の発行、年会、講演会の開催などにより、研究の進歩、若手の養成に貢献してきたと考えております。これは会員の皆様の御協力、歴代役員、担当委員、事務局スタッフなどの格別の努力、尽力に支えられたものであります。これらによって、学会の活動は、限られた条件のもとで、よく体制を整え、学会としての機能を果たせるようになったきたと思います。しかし、率直に言って、学会活動とくに会誌が日本のプラズマ・核融合の研究の実績に相応しているとは考えにくいと思います。

「会誌が負けている」ことを認めないわけにはいきません。

学会の現状

当学会は、この学問分野では遅れて発足しました。発足の時は既に、論文誌の過剰が心配されておりましたし、研究者は夫々に物理学会などの既存学会に所属し、そこでの学会活動で不便を感じていない状況でありました。この後発の影響



は今も続いております。例えば、昨年度の理事会の強烈的な会員増キャンペーンにも拘らず、会員の増加は約15%にとどまりました。

このようなハンディキャップにも拘らず、会誌の内容は着実に改善されてきておりますし、研究論文の投稿は増加し、年会などの内容は質、量ともに大幅に向上しております。一方、学会活動を支える経済では、文部省の研究成果刊行の助成金、会費・広告費などの収入増と支出の合理化により、赤字体質から脱却しつつあると考えております。活動内容と経済をあわせて、「薄日がさしてきた」思いであります。

学会、とくに会誌の今後の考え方

会誌の問題点としては、体裁の改善、欧文誌の刊行、サーキュレーション、影響力の向上をまず思いつきます。体裁については、今回表紙を新たにし、印刷方式を改善しました。欧文誌については将来の刊行を期待して、とりあえず英文論文を受け入れるよう投稿規程を変更してあります。

以上は、何れも会員の皆様から会誌に優れた論文を投稿してもらうための条件整備に過ぎません。世界が注目するような論文が数多くなれば、会誌の影響力は自ら強くなり、会誌が世界的に高く評価されるようになります。

論文が増加し、会誌の印刷費に四苦八苦する可能性はありますが、そのような苦勞は喜んで受け入れるべきことと考えております。

学会が繁栄するのも衰微するのも、要は会員の皆様の行動によってまいります。10月下旬の秋季講演会での皆様の熱心な議論を目の当たりにして、学会の今後の一層の発展を確信しました。あの熱気を研究成果にまとめあげ、優れた論文として投稿されることをお願いします。

最後に、当学会の設立、運営に当たって、御指導、御援助をいただいている文部省に、また、格別の御配慮、御協力をいただいている民間企業、研究所に、この10周年を期に、深く感謝申し上げます。